

内山 靖 総編集, 網本 和, 臼田 滋, 高橋哲也, 淵岡 聡, 間瀬教史 編
今日の理学療法指針

居村茂幸 (茨城県立医療大学名誉教授/植草学園大学教授・理学療法学)

わが国に理学療法士が誕生して、今年で50年の節目を迎えた。理学療法士養成教育については、その誕生2年前より始まっていたが、当時は専門分野の日本語教育書が皆無で、教師として世界理学療法連盟から派遣された外人教師が持ち込んだ英語のプリントのみであった。ただ記憶をたどると、この理学療法士誕生に前後して、必読書として理学療法・臨床医学・基礎医学編からなる3冊の『理学療法・作業療法教本』(天児民和編, 医歯薬出版)が出版されている。この3冊を完全マスターしておけば国家試験も万全という、いわば、当時の理学療法士にとって最低限理解しなければならない知識と技術を網羅したスタンダード版であったと言える。

現在、理学療法士の総数は約13万人に達し、かつ対応している分野も当初とは比較できないほど領域は広く、また深くもなっている。これに伴い、各領域に精通した理学療法士によって、優れた學術書も数多く発刊されているが、ある分野ではあまりに多く、また興味が深すぎ、加えて医学書の体裁、つまり治療医学の切り口で執筆されていることも多く、われわれが主として扱う障害を中心とした医学について、病態から始まれば良い理学療法のあり方が希薄になっている感もあって、理学療法臨床場面での実践書としてはいささか歯がゆい感が強かった。

このたび、医学書院より『今日の理学療法指針』が発刊された。本書は、1959年に『今日の治療指針』を創刊された日野原重明先生の言葉を借りて言い換えると、まさに「教科書ではなく、臨床の最前線にいる理学療法士による実践書」であり、その道の理学療法士が科学的な基盤に立脚した上で、今まさに自分が行っている理学療法のことを書き認められた逸品である。

本書の特徴は、総編集者の内山靖氏の言う、動作を基軸とする『臨床推論 (clinical reasoning)』の“視覚化”が体裁として試みられていることである。つ

まり、病態を推測し、仮説に基づいた鑑別と選択を繰り返しながら最も適した治療・介入を決定していく一連の心理・認知過程が臨床推論であり、さまざまな要素が入り乱れ、複雑で視覚化しにくく、教える側も学ぶ側も理解が困難であり、標準化し難い。本書『今日の理学療法指針』では、これら困難な課題に対し、基盤となる病態の理解から治療・指導方法を選択する根拠や妥当性を整理し、それをフローチャートで示すことで実践可能な標準化が試みられている。

内山氏や編集に参画された方々は、豊富な臨床経験を経て、現在は大学の要職におられる先生方であると推察するが、過去、あまり注目がなかったウイメンズヘルス・精神疾患・予防理学療法などを含め、全16章208項目もの多岐にわたる領域について、整った書式での調和を持った標準化作業は、さぞ困難を極めたことと敬意を表するばかりである。また、理学療法士界では比較的中堅の臨床実務にあたっておられる先生方を執筆者として据えられたようであるが、各執筆者も、編集者が理学療法士として今まで取り組んでこられた仕事の意図を十分に把握された上での執筆と拝読できた。

今後、執筆者の臨床におけるさらなる積み重ねが、次版以降の『今日の理学療法指針』の内容充実に結び付き、かつ領域の広がり新たな指針の項目となることを期待したい。加えて、構築困難であったわれわれの業界初の理学療法治療標準化の先駆的礎として、疾患別クリティカルパス作成や教育現場での利用も十分に期待できる。

最後に、理学療法士にとって『今日の理学療法指針』は、まさに日々の臨床時に手元に置いて参考にするべきクリニカル・スタンダードであり、まずは必読・必見であると推薦する。

(A5版, 頁562 2015年 定価5,400円 + 税 [ISBN978-4-260-02127-2] 医学書院刊)